文化映画紹介

渡部実

「オオカミの護符－里びとと山びとのあわいに－」ささらプロダクション作品
「空想の森」森の映画社作品

オオカミの護符　里びとと山びとのあわいに

【スタッフ】製作／小倉美恵子、小泉修吉　監督・編集／由井英　撮影／伊藤碩男、由井英　音声／河合樹香　助監督／中嶋美紀　音楽／姜小青（中国古箏）、千島幸明（篠笛）　ナレーター／糸博　語り／小倉美恵子　題字／永田紗戀　版画／小林奈那　編集・録音スタジオ／アクエリアム　上映スタッフ／大江純恵、吉江志づか　デザイン／熊澤正人、内村佳奈（パワーハウス）、岩井友子　撮影協力／土橋御嶽講中の皆様　資料提供／内野隆氏、ほか　共同製作／環境テレビトラスト、「オオカミの護符」製作委員会　支援／文化庁　後援／川崎市、川崎市教育委員会　完成／08年3月　16ミリ・114分

【内容】今回は日本の地域に根差した文化と生活を記録し、人がその地域の文化と風土に生かされている姿を描いた2本の記録映画を紹介したい。

1本目の「オオカミの護符」とは珍しい題名である。この映画の冒頭は神奈川県川崎市宮前区の土橋という地域の紹介から始まる。語り手でもある本編の製作者、小倉美恵子の生まれ故郷である土橋にはまだ竹やぶが残されており、氏の幼女時代の写真には彼女の亡き祖父の姿も認められる。写真が写された時代は家の周辺にも牛が飼われ、竹やぶも多く繁っていた。土橋地区には豊かな自然があり、農業が営まれていたのである。しかも昔から、古い土蔵の扉にはお札が貼られているという。実際、画面にはお札に記された文字とともに動物の姿が描かれている。それは地元では「狗さま」といわれるヤマイヌ、ニホンオオカミであり、この地域では土蔵の扉や台所にお札を貼る風習がもう265年も続いている。

このお札は東京都青梅市の武蔵御嶽山の御嶽神社が発行しているもので、神社には毎年、土橋の代表者が参拝し、新しいお札をいただいてくるという。小倉氏はこの「狗さま」が見守ってきた農民の暮らしを、自分の生まれ育った地域から辿ってみるという思いを抱く。

取材は冒頭から実写や航空写真によって現在の土橋と60年前の土橋を比較し、その違いを比べるところから始まるが、この映画の注目すべき点は、取材がお札の存在をめぐって土橋、馬絹、武蔵御嶽山、東京都府中市、埼玉県三芳、秩父といった各地方にまで領域が広がり、一口にお札といってもそれこそ、地域によって様々な個性ある神事、行事から由来していることを丁寧な映像記録から捉えていることである。

映画は終わりに、再び小倉氏の故郷、土橋に戻って来る。一見すると昔の竹やぶの風景とは異なり、現代的な建物が多く見られるが、薪の木を切る雑木林の「べーら山」に取材して、そこ

に居る古老の話を紹介。そこであらためて氏自身の家も歴史的に見れば、自分たちで作った農作物にお供えをする家系であったことが語られる。現代の日本列島においてニホンオオカミは絶滅したといわれているが、それでもなお、関東の農民たちは「狗さま」を手ずから摺り、ほこらにありがたく収め、家の近所に貼っているという。

「オオカミの護符」

「空想の森」

この映画は関東一円に今も伝わる〝護符〟の存在を現代人にもあらためて教えてくれた。長い歴史の中で黙々と続く伝統である〝護符〟によって人は生かされているという思いも感じられた。（問合せ＝ささらプロダクション　TEL044・982・7233）

空想の森

【スタッフ】プロデューサー／藤本幸久　監督／田代陽子　撮影／田代陽子、一坪悠介　録音／岸本祐典　音楽／新得バンド　整音／久保田幸雄　ナレーション／田代陽子　出演／山田聡美　宣伝（東京）／太秦　芸術文化振興基金助成作品　完成／08年　ビデオ作品・129分

【内容】続く「空想の森」というロマンティックな題名の映画は、北海道の中部に位置する新得町について、その風土とそこに生きる人たちを記録した作品である。新得という地域の名前が私の耳にも入ってきたのは1990年代の後半であった。この地域では映画祭（空想の森映画祭）が毎年初夏に行われているという。田代陽子監督はその映画祭に参加し、そこで知り合った地元の人たちとの交流を続け、いつしか、新得に魅了され、映画祭を運営する立場になった。監督は以来、7年間の歳月をかけて、新得の町と人を撮り続けた。

新得の主要産業は農業と畜産である。そこにあるのは、農家と色々な個性を持った人たちのコミュニティーを中心とした農場（共同学舎）である。そこには畑やチーズ工房があり、農産物などの販売で運営されている。つまり新得は別段、特殊な町ではない。「空想の森映画祭」も素朴ながら地元の人たちが自作の農産物を持ち寄るといった、さやかなコミュニティーの場であり、映画もドキュメンタリー映画の上映が多い。本欄でいつも話題の新作を披露してくれる小林茂監督もこの映画祭の常連である。映画は田代さんが映画祭で知り合った長年の友人、山田聡美さん、まだ赤ん坊の彼女の娘のあかりさん、といった仲間たちを中心に、この人たちを記録する形で進行する。

この映画には作者が何かを企み、目指すテーマなるものを貪欲に切り取ろうとする意図は希薄である。ただ農業を営む人たちに密着して、彼らの毎日を追っているといった感じである。ここには撮影者でもある田代監督の町の人たちへの親近感がある。とはいえ、両者の間にはお互いのプライバシーにまで立ち入るような安易な人間関係はない。記録されるのは仕事に従事しつつも、これからの生活のことなど様々な思いを伝える人々の姿である。ごく自然に農家の人たちの生活のリズムが伝えられる。

やはり注目すべきは田代監督のパーソナリティーがそのまま眼になったかのような撮影である。監督が対象を狙って撮るのではなく、キャメラのフレームにいつしか自然の風景や、赤ちゃんをおぶるお母さんの姿が入ってくるのだ。特に赤ちゃんに向ける田代監督の眼差しが良い。農作業の時に赤ちゃんがハイハイをしてお母さんのもとに行くまでを、ワンカットで写した場面には厳粛な人間の成長の営みといったようなものを感じた。作為のない撮影には自然風景や赤ちゃんが自ずとキャメラのフレームに入ってくる。

この記録映画には欲がない。それだけに、写される対象が作者に愛情をもって応えてくれるのだ。新得という町とそこに生きる人たちを記録し、多くの発見がある実に魅力に溢れる映画である。（問合せ先＝森の映画社　TEL0155・24・3638）

「空想の森」は7月26日よりポレポレ東中野にてモーニングロードショー。